

# 古墳時代後期の京都

細川康晴

## 1. はじめに

京都府の古墳時代後期について丹後、丹波、山城の3つの地域ごとに概観し整理したい。時期区分については、広瀬和雄「前方後円墳の畿内編年」(近藤儀郎編『前方後円墳集成』山川出版社 1992)及び和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」(『考古学研究』第34巻第2号 考古学研究会 1987)による各古墳の編年観をもとに筆者の独自の編年観を加え、一部修正を加えている。なお、古墳時代後期のはじまりについては、右片袖型式の畿内型横穴式石室の祖型と小型円墳による木棺直葬墳により形成される初期群集墳の出現する須恵器のTK23型式並行期からとする立場を取り8期からとし記述を進める。なお、陶邑編年TK217型式に並行する古墳については、前方後円墳編年10期(和田編年11期)に後続する時期とし、11期とし古墳時代終末期として扱いそれ以降を12期とした。なお須恵器の型式については田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966及び古代の土器研究会編『古代の土器 1 都城の土器集成』1992による。

## 2. 古墳時代後期の丹後

古墳時代の丹後地域の地域区分については、東から野田川流域、竹野川流域(福田川流域を含む)、佐濃谷川流域、川上谷川流域の4つの河川流域ごとに整理することができる。

丹後地域では5期の京丹後市黒部銚子山古墳(墳丘長105m)を最後に丹後地域全体を築造基盤とする丹後の最高首長墓の築造は停止し、以後首長墓の規模は急速に縮小している。古墳時代後期のはじまりを前方後円墳編年8期(和田編年9期)とする場合、他の地域同様、丹後地域でも首長墓の規模はさらに縮小し、野田川流域では8期の首長墓として埴輪を持つ前方後円墳の可能性がある与謝野町タベカニ4号墳や直径20mの円墳で埴輪は持たず葺石のみを持つ七面山古墳が知られる。

七面山古墳では墳丘斜面及び葺石の隙間から墳頂部から転落したものと思われるTK47型式並行期の須恵器が出土し、埋葬施設は未調査ながら墳頂部に縦穴式石槨の天井石の可能性のある扁平な花崗岩が存在している。現状では野田川流域ではこの時期にさかのぼる横穴系埋葬施設が導入された確実な事例は知られていないが、直前の7期の首長墓である

後野円山2号墳では並列して計画的に配置された2基の竪穴式石槨の存在が想定されており横穴系埋葬施設を受容する前段階の様相として注意を要する。また七面山古墳以後の丹後地域の古墳では外表施設として葺石が施されることはなく、丹後地域の葺石が施された最後の古墳である。

佐濃谷川流域では実態が不明ながらも直径もしくは1辺が20m前後の埴輪を持つ円墳もしくは方墳である京丹後市久美浜町妙見堂古墳が新たに確認されているが、佐濃谷川、川上谷川流域ともに確実に古墳時代後期に比定できる前方後円墳の存在は知られていない。

このように丹後地域における8期の河川流域ごとの首長墓はいずれも丘陵上に立地する単独墳であり、前方後円墳、円墳、方墳のいずれの場合でも墳丘長もしくは直径、1辺が50mを超えることはなく、埴輪及び葺石のいずれかの外表要素は欠落し、20m～30m級の墳丘規模の古墳の築造にとどまっている。

一方、群集墳の調査については、近年特に竹野川流域及び佐野谷川流域では丘陵上で相当数の古墳が調査されている。竹野川上流域の京丹後市大宮町小池古墳群B支群では古墳時代中期の7期頃から群の形成が始まる1辺もしくは直径10m前後の小規模な木棺直葬墳による群集墳であるが、7期から8期にかけて、TK208型式及びTK23型式の大坂南部古窯跡群(陶邑)からの搬入品とみてよい須恵器が出土している。8期を盛期として9期には古墳の築造が停止され、他へ墓域が移動したものと考えられ、群の形成を終えるまでには横穴系埋葬施設は導入されない。群形成の当初から群中に顕著な盟主墳は認められず、等質的な墳丘規模のまま群形成を終える。周辺にも小池古墳群の上位に位置する首長墳は認められない。また須恵器の搬入と方墳から円墳への墳形の変化は7期にあることを確認しておきたい。このように竹野川流域では6期に河口部の京丹後市丹後町願興寺4号墳(1辺45m)を最後に大型古墳による広域首長墓の築造が停止され、7期には墳形規模不明ながらも地元産凝灰岩製の長持形石棺を持つ京丹後市丹後町馬場の内古墳があるが、一方で小池古墳群において他地域に先駆け初期群集墳の群形成が始まっている点は注意を要する。

また、竹野川中流域の京丹後市弥栄町遠所古墳群では21号墳と19号墳が8期の古墳に当たる。いずれも直径20m未満の円墳であるが19号墳は群集墳中の盟主墳であり群全体の築造契機となった古墳であり、遠所古墳群は8期の古墳時代後期から新たに群の形成をはじめた群集墳であるものと評価できる。埋葬施設はいずれも組合式木棺を直葬するもので、少量の鉄製武器を副葬するものの、甲冑や馬具は副葬されない。須恵器は棺内には副葬されず棺外墓抗内に配置される。遠所古墳群は続く9期に群形成の盛期を迎え、埋葬施設に横穴式石室を導入し、金銅装鞍金具(2号墳)や鉄製素環鏡板付轡(1号墳)などの馬具を持

つものも現れるなど、小池古墳群とは異なりいずれの時期も古墳群の形成過程で群中に盟主墳を含む。10期に古墳の築造を停止する。

以上、竹野川流域の群集墳の形成状況については、古墳時代中期の7期頃から群の形成が始まる小池古墳群B支群においては群中に盟主墳を含まず等質的な墳丘規模の古墳により群形成が継続するものと遠所古墳群においては、8期から新たに群形成が始まり、支群の築造契機となる支群の中では最大規模となる盟主墳を含み、群形成の終盤では横穴系埋葬施設を導入するものの2つの類型があることが確認できる。

次に須恵器の導入については、先に5期の竹野川中流域の京丹後市弥栄町奈具岡北1号墳において陶質土器と初期須恵器の混在する豊富な機種構成を示す一群の土器が知られているが、7期から8期において群集墳の中にTK208型式～TK23型式の須恵器が大阪南部古窯跡群から搬入されている事例が確認できる。小池B7・2号墳及び竹野川下流域の京丹後市丹後町西小田5号墳においてはTK208型式～TK23型式の須恵器が機種としてまず大小の隴のみが搬入され、次いで小池B5号墳ではTK23型式の蓋杯2組、奈具岡遺跡S11土抗では蓋杯2組と無蓋高杯1点がある。次のTK47型式並行期になると大阪南部古窯跡群からの須恵器の搬入は途絶え、機種構成に短脚有蓋高杯が加わり、産地は不明ながら大阪南部古窯跡群以外からの搬入品のみにより構成される。このことから8期の中で丹後地域を含む周辺地域で須恵器の地方窯が操業を開始したものと考えたい。

以上のように8期の丹後地域においては首長墓として墳丘長50mをこえる前方後円墳、円墳、方墳が築造されないことから各流域ごとの地域勢力の弱体化が著しい一方、この時期に盛期をむかえるもの及び新たに群形成を開始する群集墳を認めることができる。これまでの大型古墳による首長墓の築造基盤となっていた勢力とは異なる新たな地域勢力が再編され、急速に群集墳を築造できる程度に新たな勢力として成長したものとみられる。これらの群集墳中にはこの時期の中で須恵器が大阪南部古窯跡群からの搬入品は途絶え、新たに成立した周辺の地方窯からの搬入品に入れ替わり、窯業生産の面からもこの時期が大きな画期である傍証となる。しかしこれらの新たな群集墳の築造基盤となった勢力は須恵器の導入には積極的ではあっても、横穴系埋葬施設という新たな東アジアに共通する墓制の導入には保守的であるため、渡来系の人々との接触が希薄であるというよりも、一方では石室を構築できるほど古墳の造営に係る労働力を動員できなかったものともみられる。

9期になると丹後地域の群集墳に横穴式石室が導入されるが、前方後円墳の築造は途絶え、有力な首長墓はすべて円墳となる。一方この時期を最後に墳丘の埴輪の樹立はなくなる。

竹野川流域では下流域の丘陵上に立地する直径34mの円墳である京丹後市弥栄町太田2

号墳が埴輪を持ち、竹野川流域に及ぶ広域首長墓であると考えられるが、51基からなる古墳群の盟主墳を兼ねている。また埋葬施設は木棺直葬で、太田2号墳をはじめ竹野川流域の首長墓は、後述する離湖周辺の離山古墳及び近接する遠所古墳群を除き、いずれも横穴式石室の導入に対しては消極的であり、逆に横穴式埋葬施設への墓制の変革に対しては保守的であるといえる。丹後地域では須恵器はこの時期から棺内に持ち込まれるようになるが、器種は限定され、蓋杯のみが伏せて配置される。

太田2号墳ではTK10型式古段階の須恵器の型式を忠実にトレースした口径が大型化した蓋杯と長脚1段透かしの無蓋高杯や長頸化した甗などとともに、前段階の口径が小さいままの蓋杯や短頸の甗が混在する。須恵器の配置についても棺内に持ち込まれるのは蓋杯のみで、他の須恵器は棺上面に配置されていることから、あえて横穴式埋葬施設を導入せず、須恵器を用いながらも須恵器による墓室内への食物供献儀礼を行わず、土師器を用いた棺上の古墳祭式を引き続き行っていたことが新旧の型式の須恵器の混在に示されているものと考えられる。大阪南部古窯跡群における須恵器の1型式から2型式の変化は、蓋杯の口径の大型化、高杯の長脚化、甗の長頸化などいずれも器形の増大化を志向していることは、2型式の須恵器が、大王墓をはじめとする近畿中枢に大型の畿内型横穴式石室が導入され、墓室空間の増大化に対応した器形・法量の拡大であったものと考えている。横穴式石室が導入されない丹後地域においては木棺直葬による古墳祭式が引き続き行われ、墓室空間の増大化が行われないために新旧の須恵器の型式が混在するものとみておきたい。

また太田2号墳と同時期の京丹後市峰山町大耳尾2号墳(直径23m)では角杯形須恵器が、1号墳(直径24m)では動物装飾付き甗が知られている。角杯形須恵器は新羅に起源がある器形であるとされ、国内の生産地についてはこれまで隣接する若狭の福井県興道寺窯跡の製品が同県獅子塚古墳及び岐阜県陽徳寺古墳への供給が確認されている。このことはこの時期に継体大王の擁立にかかわった2つの地域間に角杯の授受を通じて密接な関係を持つことが明らかとなった意味は大きい。

また播磨の兵庫県明石市赤根川・金ヶ崎窯跡では供給先は不明ながら角杯形と動物装飾付甗の両者を焼成している。大耳尾古墳群出土品については、胎土、型式から興道寺窯跡、赤根川・金ヶ崎窯跡のいずれの製品でもなく、これらに後続する型式の製品であるが、若狭、美濃、播磨、丹後という地域が特殊器形の須恵器の分布により密接な関係を有していることが示唆されよう。ほかに特殊器形の須恵器として京丹後市久美浜町谷垣3号墳では革袋形が、京丹後市峰山町今井古墳及び京丹後市高山12号墳では特殊扁壺が出土している。

7期以降、日本海側で最も有力な古墳が分布する地域は若狭で、朝鮮半島における軍事を中心とした交流の日本海側における基点は丹後から若狭に移ったものとみられるが、9

期から10期にかけて丹後地域でこのような朝鮮半島起源の特殊器形の須恵器が集中的に分布することは朝鮮半島の情勢が532年には金官国が新羅に降伏して滅亡し、次いで562年には大加羅(高靈)が新羅に滅ぼされたことにより、倭国に渡来した相当数の渡来人との交流なしには説明できないが、木棺直葬墳や横穴式石室に副葬されるあり方や共伴する副葬品に必ずしも輸入品や、特殊器形の須恵器単品以外に遼の影響を受けたものが含まれておらず渡来人自体が埋葬されたというわけでもない。

10期には竹野川上流域の京丹後市大宮町では前方後円墳新戸1号墳が築造される。野田川と竹野川を結ぶ交通の要衝の一つである平地峠に隣接した立地で、畿内型両袖式の石室の奥壁に石棚を持つことで知られる。川上谷川、佐濃谷川、野田川流域では、同時期の顕著な前方後円墳が見られない中で、唯一かつ丹後地域における最後の前方後円墳である。石室の構築技法は、玄室奥壁を2段積みし、前壁及び奥壁上段が垂直に架構される近畿中央の大型横穴式石室の石室構築技法と密接な関連を持つ一方、奥壁に石棚を持つことは紀伊の岩橋型石室の構成要素の一部も取り入れている。10期には川上谷川流域では畿内型両袖式石室に四頭式双龍環頭大刀を持つ京丹後市久美浜町湯舟坂2号墳があるが直径18mの円墳である。背後に群集墳を形成する。装飾大刀の分布については湯舟坂2号墳の環頭大刀柄頭は日本海側にやや分布が集中する双龍式の一つであるが、離湖に隣接する京丹後市網野町岡1号墳ではTK209型式並行期の無袖式の横穴式石室内から単龍式の環頭大刀が、竹野川上流域の京丹後市峰山町桃谷古墳では金銅装圭頭大刀が出土している。湯舟坂2号墳では双龍式環頭大刀柄頭とともに銅椀のみならず銅製水瓶を模倣した須恵器長頸瓶が共伴することから湯舟坂2号墳の環頭大刀の入手に際しては、仏具としての銅椀及び銅製水瓶模倣した須恵器もあわせて供給されているものとすれば、現状では周辺には初期寺院跡は知られていないものの仏教自体の受容もこの時期に合わせて行われている可能性があり、注意を要する。

一方金銅装の馬具の分布については、金銅装の鏡板付き轡及び杏葉は竹野川上流域のみに分布し、装飾大刀の分布とは必ずしも一致しない。

このように10期における丹後地域の古墳のあり方からは、古墳時代前期から中期を通じて顕著な前方後円墳が一度も築造されることのなかった竹野川上流域に野田川と竹野川を結ぶ交通の要衝を抑える形で新たに前方後円墳として新戸1号墳が築造されるが、その背景は近畿中央の特定の有力氏族や紀伊の勢力との密接な関係を背景としたものであったと考えられよう。一方、日本海側の装飾大刀の分布の中心である双龍式環頭大刀を持つ湯舟坂2号墳は円墳であり背後の群集墳が形成されることから群集墳の盟主墳であるとみることもできる。また10期後半には双龍環頭以外の装飾大刀も見られ、その保有形態は必ずし

も金銅装鏡板付き轡、杏葉とは共伴しないことから、丹後地域における特定有力勢力と近畿中央の特定有力氏族との結びつきは時間軸と空間軸の組み合わせにより複雑な様相である。

横穴式石室の導入については9期になると豎穴系横口式石室としてまず福田川河口部に隣接する離湖周辺に導入され(離山古墳：MT15型式並行期)、次いで9期のうちにTK10型式古段階並行期には離湖に隣接し、福田川流域と竹野川流域を結ぶ陸路に面した丘陵上に立地する遠所古墳群(31・2号墳)に導入され、野田川河口部でも宮津市霧ヶ鼻11号墳に導入される。竹野川流域では後述する9期に畿内型右片袖式石室(京丹後市丹後町大成7号墳：TK10型式新段階並行期)が、10期に畿内型両袖式石室(京丹後市大成8号墳：TK43型式並行期)が導入された後にも玄室奥壁幅が1.2mをこえ、本来の豎穴系横口式石室とは異なりその影響を強く受けた後続型式の横穴式石室が11期のTK43型式並行期まで築造され続けることに特色がある。(京丹後市峰山町今井古墳、弥栄町新ヶ尾東10号墳)

次に北部九州型両袖式石室と畿内型右片袖式石室の両者が融合された玄門部を立柱石により構成し両袖式でありながら左右非対称の片袖傾向の強い両袖式石室は野田川河口部にのみ導入される。(宮津市霧ヶ鼻10号墳：TK10型式古段階並行期、与謝野町入谷西A1号墳：TK10型式新段階並行期)

畿内型右片袖式石室は9期にまず川上谷川流域に導入され(京丹後市久美浜町崩谷3号墳：TK10型式古段階並行期)、やや遅れて竹野川河口部にTK10型式新段階並行期には導入される。(大成7号墳)

丹後地域の横穴式石室は玄室奥壁幅2.5mを超えるものがなく、10期後半には墳丘規模も直径20mを超えるものはなく動員できる労働力及び範囲は限られていたものとみられる。

一方では竹野川上流域の右岸の特定地域に集中してTK209型式並行期から京丹後市大宮町大田鼻横穴群などの横穴群のみによる群集墳の形成が開始される。飛鳥Ⅲ型式並行期に追葬ではなく新たに開掘するものがあり、奈良時代になると「厨」、「厨物」などと墨書する土師器が副葬されていることから被葬者の系譜の検討が課題である。

また11期における終末期古墳の様相については竹野川流域では京丹後市大宮町天徳6号墳など単次葬墓の横穴式石室があるが、野田川河口部では与謝野町千原2号墳において毛彫水煙文を施す帯端金具、帯飾金具が出土し、東日本に分布の中心がある隋の系譜を引くこの種馬具の西限を一挙に押し広げた。毛彫文馬具の導入の経緯については、今後周辺における初期寺院跡の有無を含め検討する必要があるが生じている。

野田川上流域の与謝野町金谷上司古墳は奥壁2段積みによる畿内型石室である。千原2

号墳、金谷上司古墳のいずれも方墳であり、被葬者像の検討が課題となっている。

### 3. 古墳時代後期の丹波

古墳時代後期の丹波地域については、大きく由良川流域の福知山盆地中心とする丹波北部と大堰川・保津川流域の亀岡盆地を中心とする丹波南部に分けて考えることができる。

丹波北部では綾部市高谷6号墳でTK23型式並行期の須恵器があり、8期の古墳である。短脚有蓋高杯の脚部の透かし孔は方形で、大阪南部古窯跡群以外の地方窯からの搬入が想定でき、丹後地域とは様相が異なる。重ね焼きの痕跡をとどめ、一括して焼成されたものがまとめて搬入されていることから生産地は比較的近隣に求められるかもしれない。

9期には由良川流域で最大の前方後円墳である綾部市高槻茶臼山古墳(墳丘長54m)が八田川上流域の丘陵上に築造される。この立地は丹波北部から若狭へと至る陸路の交通の要衝であり、この古墳の築造を契機として八田川上流域には綾部市上杉1号墳(墳丘長45m)などの前方後円墳が連続して築造され、八田川流域の勢力は丹波北部では7・8期に最も安定して連続して前方後円墳を築き、それまで優勢であった犀川下流域の綾部市以久田野古墳群の勢力をしのぐ勢力となり、若狭における前方後円墳の築造と呼応している。

ほかに由良川流域では福知山盆地西半部の由良川右岸の猪崎古墳群では前方後円墳である9期の福知山市稲葉山10号墳(墳丘長38m)の築造を契機として群集墳が形成される。

10期には福知山盆地西半部の牧川下流域に新たに前方後円墳の福知山市牧正一古墳(墳丘長35m)さらに円墳の弁財古墳(直径25m)が連続して築造される。周辺には群集墳が形成され、隣接する石本遺跡では木製鞍が出土している。これらは由良川と牧川の合流点であり丹波北部と但馬、丹後を結ぶ交通の要衝を基盤として新たに台頭した新興の勢力であるとみられる。また福知山盆地中央部に近い相長川流域の10期の福知山市奉安塚古墳では小規模な古墳ながら金銅装棘葉形鏡板付き轡及び杏葉とともに大型の鉄製はさみが出土し、馬の鬣を切るはさみと推定されている。馬具の保存副葬が馬匹生産と密接な関係を持つ可能性がある。

以上のように丹波北部では9期の北丹波最大規模の前方後円墳である高槻茶臼山古墳の築造を最後に丹波北部全体の広域首長墓は築造されず、小地域ごとに墳丘長40m前後の小規模な前方後円墳が築造される。

横穴式石室以外の横穴式埋葬施設としては横穴と横穴式木芯粘土室がある。横穴については、八田川下流域の9期に木棺直葬墳として群の形成を始める綾部市栗ヶ岡古墳群において10期の中で横穴へ移行していることが確認されている。また由良川左岸の長田野台地北辺では10期から11期にかけて福知山市仏山1号墳及び中坂7・8号墳では、横穴式木芯

粘土室が集中して導入されるが、すべて火化を受けず、追葬が行われている。

終末期古墳については、12期に犀川上流域に方墳の綾部市山尾古墳が単独で築造される。

次に丹波南部では8期に二重周濠と木製葬具を持ち前方部が短小な墳丘長36mの前方後円墳である亀岡市保津車塚古墳が保津川左岸域に築造される。周辺には前後の時期に顕著な前方後円墳の築造は見られずこの時期に保津川の水運を一時的に管理掌握したことを大きな基盤とする新興の勢力である可能性がある。また同時期には前方後円形の墳丘墓である南丹市黒田古墳に近接して亀岡盆地から丹波篠山盆地へ至る交通の要衝に墳丘長18mの小規模墳ではあるが黒田北2号墳が築造される。

9期には保津川左岸域に7基の亀岡市坊主塚古墳、天神塚古墳の方墳による丹波南部全体の広域首長墓にかわり、亀岡盆地内で最大の前方後円墳である墳丘長84mの亀岡市千歳車塚古墳が築造される。8・9期の前方後円墳には若狭の福井県十善の森古墳や山城北部の向日市物集女車塚古墳など陸路の交通の要衝に占地し、側面観を重視して配置される例が目立つが、いずれも一代限りで前方後円墳の築造を終えているという共通性もある。

一方同時期には亀岡市北ノ庄14・13号墳では北部九州系横穴式石室が導入され、これらは玄門立柱石、板石閉塞、穹窿頂天井、奥壁平行葬等の北部九州型石室の属性を忠実に取り入れながら、一方では片袖傾向の強い両袖式であり、北部九州型石室と右片袖式畿内型石室の両者が融合された石室形式となっているまた亀岡市拝田16号墳をはじめ複数の古墳で紀伊の岩橋型石室の属性の一つである石棚が導入されている。特に小型の前方後円墳である拝田16号墳(墳丘長35m)は石室用材も岩瀬型石室に似せて小型の板石を選択しているものの、袖部は段積みとし、片袖傾向の強い両袖式であることから右片袖式畿内型石室の影響も受け、北部九州型石室の影響を受けて成立した岩橋型石室と畿内型石室が融合した石室となっている。これらの北部九州的要素は10期のTK209型式並行期においても亀岡市小金岐1号墳の玄室内を石材により分割した構造は石障の系譜をひくものとして継続する。

一方、小金岐古墳群、拝田古墳群では、玄室床面に板状石材を敷き詰め、石材を使用した入念な排水溝の設置に特色があり系譜の検討は課題である。

なお、終末期の古墳として南丹波では11期に亀岡市国分古墳群で八角墳の存在が知られ、丘陵を挟んで対峙する摂津の藤原鎌足の墓と推定される阿武山古墳に近接する安威川流域の茨木市桑原古墳群でも群集墳中に八角墳存在が知られているので、北摂津と丹波南部における八角墳導入の経緯はあわせて考える必要があるだろう。

日本海側と瀬戸内を結ぶルートの一つである丹波南部と北摂津を結ぶ交通路については、犬飼川流域の亀岡市穴太古墳群で筒形銅器の出土が知られていることから、古墳時代

前期にさかのぼることが明らかとなったが、10期の法貴峠古墳群では比高50mをこえる箇所にも古墳が築かれていることや、同時期に摂津では二上山白色凝灰岩製の家形石棺を持つ茨木市耳原古墳の位置関係からこの時期に摂津と丹波南部の交通が活発化したものと考えられる。

以上のように古墳時代後期の丹波は、丹波北部では、8期には高谷6号墳の須恵器から見る周辺を含む須恵器の地方窯の成立と供給範囲の問題、9期には若狭との交通の要衝に占地する高槻茶臼山古墳の築造の背景、10期には丹後と但馬と丹波北部を結ぶ由良川と牧川の合流点に占地し、背後に群集墳を形成する牧正一古墳の築造の基盤、さらに栗ヶ丘古墳群における横穴や長田野台地における木芯粘土室導入の系譜など検討すべき課題は多い。

#### 4. 古墳時代後期の山城

古墳時代後期の山城については、大きくは桂川流域を中心とした山城北部と木津川及び宇治川流域を中心とした山城南部の二つの地域に分けて整理する。

山城北部における古墳の分布は桂川右岸域の乙訓古墳群と左岸域の嵯峨野古墳群がその分布の中心となる。

乙訓古墳群では南端の5期の長岡京市恵解山古墳(墳丘長128m)以降、前方後円墳による首長墓の築造が途絶えていたが、7期になると北端の京都市西京区山田周辺で巡礼塚古墳(墳丘長50m)、下山田桜谷古墳(墳丘長50m)などの50m級の前方後円墳の築造が開始され、8期にはその系譜は穀塚古墳(墳丘長40.5m)へと引き継がれる。山田周辺の前方後円墳による首長墓の系譜はさらに清水塚古墳(墳丘長約50m)、天鼓の森古墳(墳丘長約80m)と10期頃まで4世代程度前方後円墳による首長墓を安定して築造し、後述する嵯峨野古墳群のうち太秦周辺の天塚古墳、蛇塚古墳をはじめとする前方後円墳による首長墓系列と拮抗する関係にある。山田周辺に連続して前方後円墳による首長墓が築造される背景については、近畿中央から山城北部を経由する場合、日本海側への交通路の入り口である亀岡盆地へのひとつのルートである唐櫃越をひかえた交通の要衝への占地であることも見逃せない視点である。

一方、5期の恵解山古墳以降、前方後円墳の築造が途絶えていた南部地域では8期になると長岡京市今里・開田周辺に舞塚1号墳(墳丘長39m)や塚本古墳(墳丘長30m)の30m前後の小規模な前方後円墳が築造され、その後、9期になると長岡京市井ノ内を中心とした地域に井ノ内車塚古墳、井ノ内稲荷塚古墳、芝古墳など複数の前方後円墳が築造される。

この時期の乙訓古墳群全体の盟主墳は埴輪、葺石、周壕を備え、横穴式内に家形石棺を

持つ物集女車塚古墳であるが、規模の点では突出しているとは言えない。

物集女車塚古墳の立地は向日丘陵の裾部にあたり、中期には途絶えていた前方後円墳による首長墓の系譜が回帰してきたものと言え、陸路による交通の要衝に側面観を重視した立地は8・9期の十善の森古墳(若狭)、千歳車塚古墳(丹波南部)などの立地と共通する。

物集女車塚古墳の横穴式石室は、摂津の大阪府南塚古墳の玄室と設計を同じくしているものの、胴張であることは他地域の影響も受けている。淀川水系の中で摂津との結びつきが強い一方、尾張など東国との関係も考慮する必要があるだろう。

一方桂川左岸(嵯峨野古墳群)では、古墳時代後期から新たに古墳の築造が始まった地域であると考えられ、実態が不明な部分も多いが、嵯峨野古墳群の南部、太秦を中心とした地域の扇状地上に京都市右京区仲野親王墓古墳(墳丘長約65m)や清水山古墳(墳丘長約60m)を築造契機とし、10期の京都市右京区蛇塚古墳(墳丘長75m)まで首長墓が前方後円墳として連続として築造されることに特色がある。山城盆地内ではこのように後期になって首長墓が連続して築造される地域はほかになく、9期の天塚古墳こそ山城南部の宇治市宇治二子塚古墳(墳丘長112m)に墳丘規模で劣るものの、古墳時代後期を通じて山城の盟主として首長墓が固定されている。

蛇塚古墳を最後に10期の中で山城南部では前方後円墳の築造は停止し、首長墓の墳形は円墳に移行するが、京都市右京区大覚寺1号墳(直径50m)、双ヶ岡1号墳(直径44m)など大型円墳の築造は続き中で、大覚寺3号墳では新羅系とされる陶質土器が出土していることは注目される。

終末期古墳の様相については11基のTK217型式並行期から新たに造墓を開始し短期間で造墓を停止する小型方墳による旭山古墳群などがある。

山城南部は宇治川、木津川流域にあたるが、8期には木津川右岸南部の相楽東部で前方部が短小な墳丘長27mの小型の前方後円墳である木津川市上狛天竺堂1号墳において近畿の中でもいち早く横穴式石室が導入される。

9期には宇治川右岸に古墳時代後期において山城盆地最大の墳丘長112mの前方後円墳である宇治二子塚古墳が築造され、大型前方後円墳にも横穴式石室が導入される。宇治二子塚古墳の背後の丘陵には120基からなる木幡古墳群が形成されている。実態は不明ながらも山城地域最大の後期群集墳であり、宇治二子塚古墳の築造を契機として群形成が始まったものと考えられる。一方巨椋池以南の地域では小地域ごとにでは坊主山古墳(墳丘長45m)、長池古墳(墳丘長50m)の中規模の前方後円墳が築造されるが、これらの首長墓には横穴式石室は導入されない。巨椋池以南の地域では横穴式石室の導入に対して保守的排他的で、木津川右岸南部の相楽東部を除き横穴式石室による群集墳は発達しない。

次に木津川左岸域では9期に1辺12mの単独の方墳である柿谷古墳が知られるが、ほかに顕著な横穴式石室墳は見当たらず横穴式石室による群集墳の形成が希薄な地域である。しかし、10期になると近年八幡市女谷荒坂横穴群、京田辺市松井横穴群で相当数の横穴が新たに検出されている。横穴式石室の構築に必要な石材調達が困難な地域にあつて横穴による群集墳が形成されたものと考えられるが、これらの中には家形石棺を組みなおして転用したものや小型の陶棺を持つものや金銅装の胡籙金具を持つものもあり、周辺に顕著な首長墓が認められないことから、群内に首長墓を含む可能性と横穴数の多さからは築造の基盤は相当広い範囲に求める必要があろう。

また木津川右岸の城陽市黒土1号墳の横穴式石室が胴張気味であることは、木津川を介して伊賀を経て尾張へと至る東国へのルートの出入り口である交通の要衝への立地であることから、この石室の系譜はより広い範囲で考える必要があるかもしれない。

## 5. まとめ

古墳時代後期を8・9・10期とし、11・12期を終末期として記述を進めてきたが、8期は大王墓である岡ミサンザイ古墳のみ規模が突出し、各地の首長墓は規模が縮小する。このことは雄略朝における古墳の築造に規制が及んだこととその後の混乱に符合するものと考えたい。府内の各地でこの時期の首長墓に断絶が見られることは旧来の勢力が大型前方後円墳の築造できないほど衰退あるいは規制を受ける一方、各地の新興勢力は小規模な首長墓を築造した。山城南部では小規模な前方後円墳である上狛天竺堂古墳においていち早く横穴式石室が導入される一方、丹波南部では保津車塚古墳において木製葬具が導入され、丹後ではこの時期以降葺石が施されなくなるなど、埋葬施設にも外表施設にも古墳時代中期的な古墳祭式の定式が崩れ、多様化している。近畿中央ではこの時期には大王を中心とした棺制の中心であった竜山石製の長持形石棺にかわり、中南部九州から搬入された阿蘇溶結凝灰岩製の家形石棺が採用される一方、近畿中央の中小の首長墓には右片袖式畿内型横穴式石室が導入されている。

また、特に丹後で様相が明らかとなった竹野川流域の小池古墳群や遠所古墳群など新たに木棺直葬による群集墳を形成する階層が台頭している。TK23型式を最後に丹後では大阪南部古窯群からの須恵器の搬入が途絶えていることは、TK47型式並行期における新たな群集墳の形成にみられる小型古墳の増加に対し、須恵器供給の必要性に迫られ、地方窯として窯業生産体制の整備が行われたのであろう。1型式の須恵器の中で最も法量の小型化、製作の粗雑化は古墳への副葬品としての急速な需要に対応した結果であるとみたい。

一方では7・8期から前方後円墳による首長墓が連続して築造される桂川右岸の乙訓古

墳群北端部と左岸の嵯峨野古墳群は、その交通的な位置からは丹波を介して同時期の若狭における前方後円墳による連続した首長墓の築造と呼応しているものと考えられる。

9期は大王墓をはじめとする各地の有力首長墓に畿内型右片袖式の横穴式石室が導入され、埋葬施設の形制は再び斉一化を志向する。これはこの時期の朝鮮半島をめぐる国際情勢の中で、百済よりの外交政策をとった継体朝における施策であろう。継体大王を擁立した地域の首長墓が継体大王墓とされる今城塚古墳同様、旧勢力にとって代わる形で、これまで大型前方後円墳が築造されたことのない水陸の交通の要衝に地域最大の大型前方後円墳を築造し一代で終わる。山城南部の宇治二子塚古墳、尾張の断夫山古墳などがこれにあたる。一方では特に山城南部では前方後円墳を築造する首長層や丹後の竹野川流域の首長層のように横穴式石室の導入に保守的排他的な首長層も目立ち、これを大王墓に導入された百済の横穴式石室の導入を拒み保守的な墓制の保持とみるか、規制あるいは石材、工人、労働力確保が困難であったためかなお検討を要する。

1型式の須恵器から法量が大きく拡大し、長頸化、長脚化として斉一化が図られた須恵器の型式であるMT15型式の創出は大王墓をはじめとする有力首長墓に大型横穴式石室が採用されたことによる増大化された墓室区間において行われる古墳祭式に必要な須恵器形式として整備され、斉一化が図られたものとみられ、続くTK10型式では2型式の須恵器の中でもっとも大型化している。しかし、横穴式石室が導入されない丹後の竹野川流域の首長墓では法量が拡大しない須恵器とTK10型式並行期の須恵器が混在して使用されていることが確認でき、個々の古墳の古墳祭式の系譜についても検討することにより、地域間首長の政治動向に迫ることができるだろう。

10期には大王墓として突出した規模の見瀬丸山古墳の築造を最後に近畿中央では前方後円墳の築造が停止される。また新たな斉一性をもった埋葬施設として畿内型両袖式石室が生み出され、これまでの右片袖式石室よりも上位に位置づけられ、各地の有力な古墳に拡散し、以後両袖、片袖、無袖の順に石室規模による序列化が行われ、群集墳の中にあっても階層差を反映させるようになる。

また、須恵器の型式では長脚二段透かし孔による有蓋高杯が定型化されるなど、須恵器の長脚化、長頸化はさらに増大化させる方向でTK10型式並行期には、横穴式石室による群集墳の増加に対応した地方窯の増加による須恵器の地方色が払拭され、再び型式の斉一化が行われたものとみられる。

このような大王墓を中心とした大枠としての埋葬施設と須恵器などの副葬品の型式の斉一化は欽明朝において古墳祭式の再整備が強力に行われたものと思われる。

一方、馬具ではこれまでのf字形鏡板と剣菱形杏葉のセットが崩れ、鐘形、心葉形など

金銅装の鏡板と杏葉が同じデザインの多様な馬具が供給される。さらに金銅装の鏡板付き轡、杏葉よりも上位の階層を示すとされる装飾大刀については、丹後の湯舟坂2号墳のように装飾大刀と金銅装鏡板付き轡が必ずしも共伴しないことが明らかとなっている。群集墳中にも装飾大刀や金銅装鏡板や杏葉を持つものがあることから装飾大刀と金銅装鏡板や杏葉が必ずしもセットで一元管理されていたものではなさそうである。

中央の特定の有力氏族と各地域の有力な勢力や職掌により、これらの装飾大刀や馬具を入手が可能であったものとみられるが、この時期の朝鮮半島の新羅や高句麗との関係も踏まえさらに検討が必要である。

(ほそかわ・やすはる = 当調査研究センター調査課課長補佐兼第1係長)

#### 参考文献

- 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966  
『丹波の古墳1』山城考古学研究会 1983  
入江文敏「若狭地方における首長墓の動態」(『福井県史』資料編13) 1986  
和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」(『考古学研究』第34巻第2号 考古学研究会) 1987  
近藤儀郎編『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社 1992  
古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』1992による。  
『新修亀岡市史』資料編1 亀岡市 2000  
『加悦町史』資料編 第1巻 与謝野町役場 2007  
京丹後市史編さん委員会編『京丹後市の考古資料』京丹後市 2010  
『平安京以前 - 古墳が造られた時代 - 』(京都市文化財ボックス第26集)京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2012

その他多くの発掘調査報告書を参照させていただきましたが紙幅の意都合により省略させていただきましたのでご寛容ください。

時期	丹後		京都		山城		畿内		隣接地域		備考					
	川上谷山・佐渡谷川	竹野川(種田川)	野田川	丹波北部(由良川)	丹波南部(津川)	山城北部(桂川)	山城南部(赤井山・宇布川)	大和	河内	和泉		摂津	播磨	但馬	若衆	近江
8期 (TK23・47)	砂見堂 小池B ×6	西小田5(11) 5(9)	☆ターペ カニ4 七面山(20)	☆高谷6 (13)	☆保津 車塚(86) ☆里田北2 (18)	☆登塚(45) ☆清水 塚(50) ☆舞塚1 号(39) ☆塚本(30)	☆赤塚(32) 上船天竺堂 (27)	☆鳥屋ミサ ノサノ(138) ☆西山 塚(114) ☆西垂 懸(118) ☆東乗鞍 (72)	☆高井田山(22) ☆岡ミサン サノ(240) ☆峯塚(98)				☆長塚(70) (645) ☆十善の塚 (60)	☆堀玉稲荷山 (武蔵:117) ☆大谷紀伊(70) ☆番塚巻前(50) ☆間行丸御前(55) ☆江田船山(肥後:62)		
9期 (TK15・TK10)	前谷B1 (15)・4 (65) 前谷B 3(7) 前谷3(16) 天王山 B1(18) 天王山A 5(14) 谷塚3(15)	難山(15) 大田2(34) 大川尾 2(23,1) 難山1(19) 遠野2(17) 大坂7(06)	☆檜山 1(16) 霧ノ鼻 1(10) 大谷西A1 1(45) ☆砂見 1(39,1) 高谷3(18)	☆高瀬茶 臼山(54) ☆船塚山 1(38) ☆上杉 1(45) ☆野山 11(39,1) 高谷3(18)	☆千歳車 塚(84) 北ノ庄 14(10)・ 13(8,5) ☆梓田 16(35) 鹿谷18	☆天塚(71) ☆物塚 車塚(8) ☆井ノ内 車塚(37) ☆井ノ内 稲荷塚(48) 1(45) ☆長他(50)	☆空治二 子塚(12) ☆門ノ 前(37) ☆野山 1(30) ☆坊主山 1(45) ☆長他(50)	☆市尾 墓山(66) ☆カワナ 9(塚115) ☆別野大 塚(115) ☆石上大 塚(107) ☆市尾 墓山(66)	☆河内大 塚山(335) ☆野中井 ノ山(122) ☆高懸塚 山(122) ☆白雲山 (115)	☆高木車塚 (48)	☆南塚(50) ☆今城 塚(30) ☆藤福 寺(11)	☆西宮 山(35)	☆観音塚(23) 禁裏塚(64)	☆鎌子 塚(32,5) ☆上船 塚(70) ☆二子山 3(26) ☆行陣(66) 丸山塚(50)	☆鴨船荷 山(45) 円山(28)	☆雁夫山(肥後:150) ☆白鳥(肥後:70) ☆大谷1(22)紀伊(80) ☆大日1(53)紀伊(73) ☆天玉塚(紀伊:58) ☆山代二子塚(雲:92) ☆明見(備前:31) ☆岩戸山(筑後:132) ☆寿命玉塚(筑後:78)
10期 (TK43・209)	(須田平 野(16,4)) 湯舟坂 2(18)	(西外) ☆新戸 1(35) 大坂8 高山12(18) 岡1 大田 轟 柳文部	高良1 滝岡田(20)	☆牧正 一(35) 舟財(25) 泰安塚 仏山(12) ×11・71(22) ×17・1(20)	拜田8 (12)・9(8) 小念蔵7 小念蔵7(17 及々岡 1(44)	大荒寺1(50) 大荒寺2 (25×30) ☆地塚(75) 松井井次郎 墓(60)	黒土1(26) ☆谷荒坂 横穴群 松井井次郎 墓(60)	☆大和 二塚(60) ☆島土 塚(60,5) ☆見瀬丸 山(31,0) ☆榎山(40) 藤ノ木(48) 牧野(60) 赤坂天王山 (60)	愛宕塚(25)	海北塚 耳原(23)		☆見手 山1(35) 塚山(30) 笹谷2 (12×14) 二具谷1(20) コノ年月塚 (28)	☆栗北(20) 賀茂南(20)	☆国分大塚 (45)	☆ころもり塚(備前:90) ☆江崎(備前:45) ☆大念寺出雲:91) ☆乗塚(筑後:60) ★岡田山1(出雲:21,5)	
12期 (TK217)		上野2(13× 8)	釜原上司 千塚2(18)			今里大塚 (48)	石舞山(50) 岩屋山(46)									
12期 (保良川)																

☆前方後円墳  
★前方後方墳  
( )纏年の規模が弱いもの